

押入れ産業社長 森田 浩史氏

学生時代は陸上部だった。

幼い時

から走る



のは速かった。中学では野球部に入り、足が速かったので1番センター。ぼてぼての内野ゴロでも足で塁に出た。ただ、他校との試合で勝った記憶はない。

通っていた中学校は区立だったが、なぜか陸上部だけは

連帯生むバトンパス

当時の興奮が蘇^{よみがえ}ってくる。
既に50年も前

のことである。

めっばう強く、全国大会に行くレベルで注目されていた。足の速い私は、陸上部の顧問から半強制的に陸上部に移籍させられ、しごかれた。初めて陸上用のスパイクを履いて走ると、めっちゃうちゃ速く走れたのがうれしかった。顧問

バトンとか、たすきとか、つないでいくことに日本人は何か独特の思いがあるのではないだろうか。哀愁のようなものさえ感じるのは私だけではないだろう。

の熱血指導のおかげで、めきめき速くなった。種目



一体感、連帯感という言葉は今の時代にそぐわないのかもしれないが、日々の業務の中でも、個々に埋没せずに、「任せた」「任せろ」の暗黙のバトンパスは忘れずにいたいと思うのである。